

様式1〔申し合わせ事項〕 【委員会、全協：共通様式】

令和4年8月8日

東員町議会

議長 三宅耕三様

東員町議会

伊藤治雄

研 修 報 告 書

研修期間	令和4年8月2日（火） ～ 8月3日（水） 【2日間】
研修（視察）先	滋賀県 近江八幡市 京都府 京都産業大学
目的（テーマ等）	近江八幡市 災害時の地下水を活用した代替飲料水確保について 湧水を利用した水路について 京都産業大学 学生提案のトリックアートを用いた横断歩道について
資料添付の有無	なし

※ 研修概要、内容、所感などは、次ページに記入すること。

様式 1〔申し合わせ事項〕：【委員会、全協：共通様式】

〔氏名： 伊藤治雄 〕

研修概要、内容、所感

⇒印以降は所感

■近江八幡市の状況

- ・ 1995 年（平成 7 年）の阪神・淡路大震災及び 2011 年（平成 23 年）の東日本大震災を教訓に、コミュニティーセンター（小学校区）を防災拠点と位置づけ、防災機能の強化のための整備を実施中である。現在、10 学区中 6 学区で整備済となっている。（代表的な施設として金田コミュニティーセンター）

避難想定人数は学区の約 10%と想定し、生活に必要な最低限の飲料水は一人一日当たり 3 リットルを 3 日分確保している。その水源として 150 メートルの深井戸を掘り、通常時は飲料水や雑用水として活用している。同時に、生活排水の一時貯留槽として地下式で 90 立方メートルを確保している。

- ・ 深井戸の特徴として、水質・水量・水温が一定しており、浅井戸（40 メートル程度）とのリスクヘッジを考慮し、深井戸を選択した

⇒本町は浅井戸であり、恒久的な生活用水確保といった観点からして早急に深井戸への転換を検討すべきと考える。

- ・ 市が民間企業に委託している「地下水膜ろ過システム」とは、地下水を安全な飲料水に浄化するシステムで、井戸は地震にも強く、水ライフラインを確保する上でも有効な手段である。断水リスクの軽減を図り、避難所の運営上、必要な施設と考える。

利点としては、コンパクトな施設で飲み水としてポイントごとに設置できることなどがあるものの、弱点として水道事業法により複数への送水ができないとのことである。民間委託であり 24 時間 365 日の監視体制の下での運用である。

⇒委託金額等が明確でないため、費用対効果の点などで検討を要する部分もあるものの、管理体制等有効な手段であると思う。

- ・ 災害時の相互応援協定は、行政組織では地域防災計画に基づき姉妹都市など 12 団体、その他民間団体等で 38 団体と締結しており、食料や飲料水等に拘ることなく細部にわたり協定を締結している。

⇒人口 82,000 人規模の都市としては多くの行政や民間団体と協定し、非常に充実していると考ええる。

- ・ 金剛寺町では、2014 年頃から生態系保全活動に取り組み、その後その一環事業として湧水を利用した「ホタル再生」活動に取り組んでおり、きれいな水の大切さを市内外に発信している。

- ・当市は水郷地帯（全国初の重要文化的景観に指定）を活用し、民間活力により手漕ぎ和船による観光集客事業を補助金なしで運行している。
⇒地域資源を上手く活用している最たる事例と考える。

■京都産業大学

- ・トリックアートが実現したのは、京都府警察本部が平成 29 年度から実施している「ポリス&カレッジ IN KYOTO」事業の令和 2 年度事業の最優秀賞として採択されたものである。横断歩道を目の錯覚を利用して立体的に表示し運転手に注意を促すもので、令和 3 年 8 月に亀岡市内の 2 箇所の小学校通学路に設置した。
- ・設置記念セレモニーでは、テレビで放映され話題を提供し、反響も大きかった。教授によれば、色々な方面から検討することは、学生の活躍を促し教育上良いことであり、地方公共団体との連携することの大切さを感じ、有意義であった。
- ・アート設置後の平均速度が低下し、横断歩道における歩行者優先の認識を明確化させるなど安全運転への効果はあった。
- ・白色の横断歩道表示以外は市町村負担である。
- ・交通安全施設ではあるが、交通規制を補完するためには、規制を担保するため関係機関との調整が必要となる。
⇒確かに設置されて間もない時期の写真では立体的に見えたものの、現地視察を行ったところ、年月の経過とともに劣化が進展し平面的にしが見えなかった。設置経費は当該市町村の負担で一箇所当たり約 40 万円を要し、一般的な横断歩道の倍の経費が必要となり、費用対効果の面からして一考する余地がある。
- ・住民やドライバーからの苦情は特になく、速度制限の強化、他の安全施設も同時設置、幹線のバイパス化も減少し、周辺住民からは好意的である。
- ・トリックアートを用いた道路標示の発展性を伺ったところ、全国的な普及は限界があるとの答弁であった。
⇒三重県では、2019 年度の信号機のない横断歩道での停車割合が全国最下位の 3.4%であったものが、テレビ等のアナウンス効果等で翌年度には 27.1%で全国 14 位となった。メディア等の活用と県内一番目となる事業への注目度を考えれば、単なる二番煎じではなく斬新かつ積極的な施策展開が重要と考える。